

# 『釈軌論』の經典註釈法とその典拠

上 野 牧 生

## 1 はじめに

### 1.1 問題の所在

かつて、インド北部における説一切有部の圏域には、阿含に対する註釈文献のみならず、註釈に際しての方法論を主題とした文献が存在したようである。それらはほとんど現存しないようであるが、それらに基づいて後代に作成された文献のひとつに、ヴァスバンドゥ (Vasubandhu) の『釈軌論』(Vyākhyāyukti) がある。現在はチベット語訳でのみその存在が確認される『釈軌論』は、ひとまず、經典註釈者および説法者の予備軍を対象に、説一切有部の阿含を精確に解釈し、註釈するための方法論を解説した指南書である、とすることができる。

本書については、これまでに山口益や本庄良文らによる優れた研究が蓄積され、その輪郭が少しずつ象られてきた。一方で、多くの問題が未解決のまま残されてもいる。なかでも、本書がいかなる先行文献に由来するののかという点は、本書の性格をより明確にする上での、大きな問題のひとつである。

かかる点を解明するための作業の一環として、本稿では、『釈軌論』の骨格である註釈方法を確認し、その方法が『瑜伽師地論』『摂釈分』などの先行文献に基づくことを指摘する。

### 1.2 『釈軌論』の構成

チベット語訳『釈軌論』は全五章から構成される。ただし章題への言及が皆無であるため、ヴァスバンドゥ自身によりこの章立てが施されたとは考えにく

い。おそらく前期伝播期の翻訳官による独自の判断に基づき、チベット語へと翻訳された段階で、付加されたものと推測される。そのチベット語訳の章立ては、記述の「分量」と、おおよその「内容区分」との二点を勘案して、全体を五つに区分したものである。チベット語訳の校訂版である LEE [2001] は、かかる章立てを度外視し、『釈軌論』全体の内容にしたがって、独自の科段を組み立てた。その科段に基づいて整理すれば、『釈軌論』の主題は、およそ以下のように大別される。

- ① 註釈者となるための要件
- ② 五相による經典註釈方法（五相についての総論、および各論としての各相の定義）
- ③ 註釈方法に先立って説明されるべき、「恭しく〔法を〕聴くことに関する〔話〕」
- ④ \**Sūtrālamkāra* の引用による総括

①最初の主題は、註釈を行うに足る有資格者の要件である。註釈方法の解説に先立ち、ヴァスバンドゥは註釈者となるための要件である「聞」(śruta) から言及をはじめめる。具体的には、十二部教（とりわけ契経）に通暁することが要件として提示される（第一章冒頭）。続いて、②要件を満たした者により註釈に際して必ず説明されなければならない五つの相 (ākāra) が示され、それらがひとつずつ個別に定義される（第一章から第四章）。この節では、阿含經典の經文を解釈例として、極めて体系化された方法論が提示される。そして、五つの相がすべて解説されたのち、③聴衆を説法の聴聞へと導くための方策として、仏説の偉大性と、仏説を聴聞した場合の福德が列挙される（第五章）。①要件を満たした者は、説法に際して、実は②に先立ち「恭しく〔法を〕聴くことに関する〔話〕」をなすべきだとする。この三節に続き、④『釈軌論』の最後部では、『釈軌論』全体を総括する内容をもつ、\**Sūtrālamkāra* と呼ばれる文献からの引用文で締め括られている（第五章末尾）。

## 2 『釈軌論』における註釈方法

### 2.1 五相とは

①註釈者となるための要件について言及した後、ヴァスバンドゥは五つの相によって阿含を註釈する方法を論ずる(②)。この五相に沿って『釈軌論』全体が立論されているという点で、当該の註釈方法は『釈軌論』最大の眼目と言える。ヴァスバンドゥは次のように述べる。

[VyY] [LEE 6.5-18; D shi 30b2-4; P si 33b4-6]

【問】以上のように「要件を満たす者と」なったかの者は、どのように経を註釈しなければならないのか? (\*katham sūtram vyākhyātavyam)

【答】五つの相によって、である (\*pañcabhir ākāraiḥ)。〔すなわち〕<sup>(1)</sup> 経の、目的 (prayojana)、要義 (piṇḍārtha)、語義 (padārtha)、次第 (anusamḍhi)、論難・答釈 (codyaparihāra) の二つ、を説明しなければならない。ここで〔詩頌にまとめて〕言う。

経の意味内容を語る者たちは、目的と、要義と、語義と、次第と、論難・答釈とを説明しなければならない。<sup>(2)</sup> (総括偈第1偈)

論難と答釈の二〔語〕が一〔語〕にまとめられているのは、論難に答釈するという意味だからである。

註釈者としての要件を満たした者が、註釈に際して必ず説明しなければならないのは、「目的」「要義」「語義」「次第」「論難・答釈」からなる五つの相である。そして『釈軌論』では、第一章から第四章にかけて、五相の一つ一つが丹念に定義されてゆく。なお、「目的」、「要義」は第一章で論じられ、「語義」は第一章後半から第三章冒頭に跨り、「次第」は第三章、「論難・答釈」は第三章から第四章全体に及ぶ (SKILLING [2000: 318] は「論難・答釈」が第三章のみに位置すると記しているが、誤りである)。とりわけ、第四章における大乘仏説論は夙に有名であるが、それは、各15項目からなる「論難」と「答釈」のうち、第十五番目の「答釈」に相当する。

## 2.2 五相の順序

五相の提示に引き続き、註釈を施すに際しての五相の説明順序が言及される。ヴァスバンドゥは次のように述べる。

[VyY] [LEE 6.19-7.12; D shi 30b4-6; P si 33b7-34a3]

【問】 どうしてこれら〔の五つの相〕を説明しなければならないのか？

【答】 経の意味内容の偉大性を聞けば、〔聴聞者は〕聴聞や受持に努めるから、〔最初に〕「目的」を説明しなければならない。またその「目的」は、経の「要義」から理解される。また「要義」は、「語義」から〔理解される〕。「語義」の、矛盾のない順序は、「次第」から〔理解される〕。方軌（\*yukti）と矛盾せず、前後に矛盾のない〔「次第」〕は「論難・答釈」から〔理解されるの〕だから、「要義」などについても説明しなければならない。ここで〔詩頌にまとめて〕言う。

経の意味内容の偉大性を聞けば、聴聞者は、聴聞や受持に敬意〔をもつて〕努めるから、最初に「目的」を説明しなければならない。

(3)  
(総括偈第2偈)

そ〔の経〕の「要義」からそ〔の「目的」〕が理解され、「要義」は「語義」から〔理解され〕、〔語〕順、方軌、前後〔など〕に矛盾のないことが、〔「次第」及び「論難・答釈」の〕二つから〔理解される〕。

(総括偈第3偈)

以上の説明から明らかであるように、それぞれ後の相が、前の相を理解するための要件となっている。そして五相の中で唯一、「目的」のみが、仏説の偉大性を説示することで、聴衆を経典の聴聞や受持へと動機付ける意図をもつ。ゆえに、註釈者の要件を満たした者が最初に解説するのはこの「目的」であると考えられる。しかし、第一章から第四章において五相がすべて説明され終えた後、第五章の冒頭では、以下の如き注意がなされる。長文であるが、グナマティ（Guṇamati）による『釈軌論註』（Vyākhyāyuktīkā）とともに引用する。

[VyY] [LEE 250.4-251.8; D shi 114a7-b4; P si 133a4-b2]

「論難・答釈」(codyaparihāra) という相 (ākāra) についても説き〔終え〕、どのように經典を註釈すべきかについての方軌 (\*yukti) も説いた。

さらに、説法者は、まず最初に、經典を引用して、論難して、考察しなければならない。聴衆に諸答釈を求める思いを生じさせるためである。

一方、求める思いの弱い者たちにも、耳を傾けるようにさせるため、恭しく〔法を〕聴く (\*śuśrūṣā) ことを註釈しなければならない。

【問】この、「恭しく聴く」とは、いったい何か？

【答】ある話 (\*kathā) に基づいて、〔聴衆が〕恭しく聴くように説明することである。〔そして聴衆が〕耳を傾けた際、〔説法者は〕「目的」などの順序に従って、經典を註釈すべきである。

【問】論難の後に考察するとしても、何のために論難を語るのか？

【答】論難の直後に、諸の答釈を容易に理解させるためである。

【問】先に、

經の〔意味内容の〕偉大性を聞けば、聴聞者は、聴聞や受持に敬意を〔もって〕努める。それゆえ、最初に「目的」を説明〔しなければならない〕。(総括偈第2偈)

と〔前出箇所〕で説いたのであれば、なぜ最初に「恭しく聴くこと」を註釈しなければならないのか？

【答】目的が説明された場合にも、〔聴衆は〕恭しく聴かなければならないためである。

一部には、經典の意味内容を理解することができない者たちが出てくるから、せめて法に対してだけでも、恭しく聴きたいと望むことによって、かれらに福德を生じさせるためであり、

〔經典の〕意味内容を理解したいと願うことによって、智慧の界を生じさせるため、必ず最初に「恭しく〔法を〕聴くこと」を註釈しなければならない。

[VyYT] [D si 278a7-b1; P i 164a1]

「目的」などの順序に従ってとは、「目的」,「要義」,「語義」,「次第」,「論難・答釈」であって、以上の順序に従って、である。

以上は第五章冒頭の一節である。ヴァスバンドゥが総括偈第2偈を自ら引用して示すように、第一章では五相が「目的」以下の順序に沿って説明されるべきだとする。ただし第五章の記述による限り、この点は条件付きであって、より正確には「恭しく〔法を〕聴く」(\*śuśrūṣā/\*[dharmaṃ] śuśrūṣati) ことが五相に先立ち最初に説明されるべきであるとする。<sup>(4)</sup>

そして山口[1959: 186]が僅かに言及したように、第五章は首尾一貫して、「恭しく法を聴かなければならない」(gus par chos mnyan par bya) 理由を只管に列挙するという内容をもつ。つまり、「敬意をもって拝聴しよう」と聴衆を説法の聴聞へと動機づけるための「話」(\*kathā) が、第五章の主内容である。

なお第一章の冒頭では、教化対象が「経を註釈しようと望む者」(sūtram vyākhyātukāmah) に照準されているが、第五章では、一転して「説法者」(\*dharmakathika) へと変化する。この「説法者」は、所定の課程を修了した「経を註釈しようと望む者」と同一線上に位置する存在とみなすことができる。即断は避けなければならないが、ある一定の段階に至った註釈者が「説法者」と呼ばれた可能性もあろう。

つまり『釈軌論』は、第一章から第四章までが、「経を註釈しようと望む者」を対象とした、阿含の註釈(解釈)方法の解説、そして第五章が、「説法者」を対象とした、聴衆を説法の聴聞へと動機づけるための「話」を主題とする。

### 3 「摂積分」における註釈方法

#### 3.1 「摂積分」の構成

以上、『釈軌論』の骨格である五相とその順序について確認した。ただし、この五相はヴァスバンドゥによる創見ではない。というのも、『釈軌論』の五相法と酷似した方法が、『瑜伽師地論』「摂積分」(\*Vyākhyāsamgrahaṇī) にも確

認されるからである。

「摂積分」を主対象とした研究は、uddāna（目次の役目をなす詩頌）に依拠して「摂積分」及び「撰異門分」（*Paryāyasamgrahaṇī*）の構成を整理した向井[1996]がほとんど唯一にして最良のものである。そして向井[1996: 371]が指摘するように、「摂積分」の構成および内容を明示する一節が、「摂積分」の本文中に確認される。

[VyS] [D hi 61a7-b3; P yi 72b8-73a5]

さてそこで、説法者は、経を註釈する法の定義を、以下のように確立し、

①最初に、文（\*vyañjana）と義（\*artha）を求めなければならない。

②その後に、上述したとおりのやり方で、法を説く際に、他の者たちへ向けて、五相でもって〔経を〕註釈しなければならない。

③このようにして、上述した十種をそなえた説法者の定義の中の、「法と〔その〕義に巧みであること」（\*dharmārthakaśālyā）などによって、自分自身を確立しなければならない。

④このように〔して〕自分自身を確立した後に、五種の聴衆（\*parśad）に向けて、直前に〔述べた〕如き「喜樂」の話（\*kathā）などの八種〔の話〕によって、そうした類の話をしなければならない。

⑤それらの話を話す際に、他の者たちに〔法を〕聴かせ、敬意を抱かせて、まずもって大師（\*śāstṛ）〔の徳〕を称讃させなければならない。

以上のように、五つの要件を伴って法を説く者は、五つの要件をそなえた音楽がそうであるように、自他に大きな歓喜を生じさせ、さらに、自他に利益をももたらすであろう。

「摂積分」自身が解説するように、当該文献は五つの主題から構成される。すなわち、①「文」と「義」、②「五相による註釈方法」、③十種からなる「説法者」の定義、④五種の「聴衆」に向けて説法者が話すべき、八種の「話」、⑤大師の「称讃」、の五つである。以上の点から、「摂積分」は、説法者の予備軍を対象としていたこと、そして阿含經典の註釈方法および聴衆を説法の聴聞

へと動機付ける方法の提示を内容とすることがわかる。この点は、従来から推測されてきたように、『釈軌論』との内容上の連続性を予想させる。

また前述したように、『釈軌論』では第一章から第四章までは「経を註釈しようとする者」が主語とされており、その同一線上の存在として、第五章では「説法者」が主語とされている。一方で、「摂積分」では全体に亘って「説法者」が主語とされている。両文献間の主語の一致は注意されてよい。内容的にも、『釈軌論』第一章から第四章は①②と、『釈軌論』第五章は③④⑤と主題を共有する。こうした点から、『釈軌論』は「摂積分」を踏襲して作成された可能性が浮上する。<sup>(5)</sup>

### 3.2 「摂積分」における五相とは

「摂積分」の冒頭では、②「五相による註釈方法」に関連して、「註釈」(rnam par bshad pa, \*vyākhyā) が次のように定義されている。

[VyS] [D hi 48a3; P yi 56b5]

「註釈」とは何か。要約すれば、五つの相(\*ākāra)であるとみなすべきである。「法」(\*dharma)と、「等起」(\*samutthāna)と、「義」(\*artha)と、「論難・答釈」(\*codyaparihāra)と、「次第」(\*anusamdhī)とである。

「摂積分」においても、『釈軌論』同様、各項目が「相」(\*ākāra)と呼ばれている。そして同書が提示する五相は、「法」、「等起」、「義」、「論難・答釈」、「次第」から成る。『釈軌論』の五相と比較した場合、「摂積分」のそれは一見して「論難・答釈」と「次第」の二相のみが共通するように見える。しかし、上記の第三相である「義」について、後の箇所では次のように記されている。

[VyS] [D hi 55a2-3; P yi 65a4]

そ〔の五相〕のうち、「等起」を説明した後に、「義」を説明しなければならない。「義」は二種であり、「要義」(\*piṇḍārtha)と「語義」(\*padārtha)とである。



「摂積分」では第三相「義」が「要義」と「語義」とに二分される。ゆえに『釈軌論』において挙げられる五相のうち、「目的」を除く四相が既に「摂積分」において提示されていたことになる。ただし『釈軌論』では言及されない「法」と「等起」も、実は、定義内容を改変した形で『釈軌論』に組み込まれている。まず、「摂積分」の第一相である「法」は、『釈軌論』の冒頭で提示される①「註釈者となるための要件」と関連する。「摂積分」では、「法」について長く詳細な定義が与えられているが、その内容は、十二分教である。そして『釈軌論』が註釈者予備軍の学習課題として挙げる「法」も、同じく十二分教を指す。

さらに、「摂積分」の第二相である「等起」は、『釈軌論』における第一相である「目的」の祖型とみなすことができる。「等起」と「目的」は、後者の方が前者より体系的であるが、その定義に用いられる術語は逐語的に完全に一致する。したがって「摂積分」の五相は、大幅に内容が改変された上で、『釈軌論』により踏襲されたとみなしうる。

### 3.3 「摂積分」における五相の順序

さらに「摂積分」では、五相の順序について次のように記されている。

[VyS] [D hi 54a1-3; P yi 63b7-64a1]

同様に、文を本体とする〔経〕と、義を本体とする経を、説法者は、五相でもって註釈することにより、活動しなければならない。〔説法者は、〕最初に「法」を説明しなければならない。その次に「等起」を説明しなければならない。その次に「義」を説明しなければならない。その次に「論難・答釈」を説明しなければならない。その次に「次第」を説明しなければならない。

「摂積分」では五相が以上の順序で説明されるべきだとする。説明順序が第一相から第五相へと推移する点でも『釈軌論』と共通する。

## 4 他文献における註釈方法

### 4.1 \*Sūtrāṃkāra における註釈方法

以上、両文献の共通性を確認した。ただし、『釈軌論』を著述するに際して、おそらくヴァスバンドゥが踏襲した註釈方法は「撰積分」のみに基づくわけではない。というのも、『釈軌論』の最後部では、\*Sūtrāṃkāra (\*SūA) と呼ばれる文献の註釈方法への言及がなされている。ヴァスバンドゥは『釈軌論』末尾の結偈直前に、当該文献から二組の頌を引用する。二組のうち前者は経を註釈する方法 (\*sūtravyākhyānaya) を説き、後者は二種類の「話者」(\*vaktṛ), おそらくは「註釈者」と「説法者」たる者はいかなる者であるべきかを説く。以下に『釈軌論註』の一部とともに、前頌のみを引用する。

[VyY] [LEE 311.4-20; D shi 134a2-4; P si 155b3-6]

\*Sūtrāṃkāra (*mDo sde'i rgyan*) においても、経を註釈する方法 (\*sūtravyākhyānaya) が説示されている。

喜悅 (\*priya) と、意趣 (\*abhiprāya) を含んだおことばが多種に語られ〔るべきであり〕、語義 (\*padārtha) と、次第〔の〕連結 (\*anusamdhī-prabandha) と、譬喩 (\*upamā) が多く語られるべきであり、また諸矛盾・答釈という手段 (\*viruddhaparihāropāya) が多く語られ、知られるべきである。以上の諸徳を有する者が、もし〔註釈を〕説くのであれば、善説なのである。

この頌によっては、仏説が五徳として示されていると聞き及ぶ。目的を有すること、意趣が深甚であること、定義が深甚であること、前後の関係性、方軌との関係性〔の五徳〕である。

[VyYT] [D si 300a7-b1; P i 192b8]

喜悅とと詳細に説かれている中で、経の明示 (\*saṃdarśana) などが喜ばしいのであって、すなわち「目的」が語られるべきである。

[VyYT] [D si 300b2-3; P i 193a3-4]

〔諸〕矛盾が知られるべきである〔という中で〕、諸矛盾は二種がある。語に対して論難〔すべき矛盾〕、義に対して論難すべき〔矛盾〕、という意味である。

\*SūA の説く「経を註釈する方法」は、「喜悦」、「意趣」、「語義」、「次第の連結」、「譬喩」、「諸矛盾・答釈」の六相から構成される。そしてグナマティの註釈に従えば、そのうち「喜悦」は「目的」と、「諸矛盾・答釈」の中の「諸矛盾」は「論難」と同義であるから、『釈軌論』における五相はすべて言及されていることになる。したがって当該方法が『釈軌論』のそれと共通性をもつことは明白である。さらに、この頌を含む二組の頌が『釈軌論』の最後部で引用され、それらが『釈軌論』全体を象徴する内容をもつ点から、LEE [2001: 351] の考えるように、単なる附論 (Appendix) として引用したとは考え難い。ヴァスバンドゥにとって極めて重要な典拠であったと筆者は考える。その作者についてはヴァスバンドゥもグナマティも言及しないが、文献名からして、アシュヴァゴーシャ (Āśvaghoṣa) の可能性が推測される。

#### 4.2 『阿毘達磨集論釈』における註釈方法

「撰釈分」と『釈軌論』との隔たりを埋める中間的存在として、『阿毘達磨集論』 (*Abhidharmasamuccaya*, 以下『集論』) がある。SKILLING [2000: 319] が指摘するように、『集論』の註釈である『阿毘達磨集論釈』 (*Abhidharmasamuccaya-bhāṣya*, 以下『釈論』) にも『釈軌論』の五相と類似した註釈方法が確認される。当該文献の最終第五「論の決択」章 (*Sāṃkathyaviniścaya*) における「撰釈門」 (*vyākhyāsamgrahamukha*) は、次のように定義されている (ボールド体は註釈対象である『集論』の文章であることを示す)。

[ASBh §199B] [TATIA 142.11-12; ms 134A3-4]

撰釈門とは、そこで、経が生ずる目的、語義、次第、意趣、論難・答釈<sup>(7)</sup>が説明されるのである。

『釈論』の作者と目されるジナプトラ (Jinaputra) の解説する「摂釈門」は、目的 (prayojana), 語義 (padārtha), 次第 (anusandhi), 意趣 (abhiprāya), 論難・答釈 (codyaparihāra) から成る。『釈軌論』の第二相である「要義」を欠き、代わりに第四相として「意趣」(abhiprāya) を加えた五相が提示されている。「摂積分」と比較した場合、「摂積分」には明示されていない (=「等起」という形で暗示されている)「目的」が挙げられる点で『釈軌論』に近い。ただ残念ながら、『集論』およびその関連文献によっても上記五相に対する詳細な説明が一切与えられていないため、その定義内容は不明である。

ジナプトラがヴァスバンドゥよりも後代の人物であることは間違いない。そして『釈論』が提示する五相は、註釈対象である『集論』には明示されていない。そのためアサンガ (Asaṅga) が「摂釈門」をどのように捉えていたのかはわからない。ジナプトラの註釈内容をそのままアサンガの趣意とみなせば、「摂積分」と『釈軌論』を繋ぐ中間的存在として『集論』第五章の記述を位置づけることができるに過ぎない。ゆえに、『集論』を『釈軌論』の一典拠とみなすのは難しい。

## 5 おわりに

以上、『釈軌論』における註釈方法の典拠を求め、四つの文献にみられる註釈方法を確認した。『釈軌論』を基点として、「摂積分」、\**Sūtrālaṃkāra*, 『阿毘達磨集論釈』が提示する各相を一覧にして以下に示す。

『釈軌論』	「摂積分」	* <i>Sūtrālaṃkāra</i>	『阿毘達磨集論釈』
ø	1. *dharmah	ø	ø
prayojanam	2. *samutthānam	1. *priyaḥ	1. prayojanam
piṇḍārthaḥ	3-1. *piṇḍārthaḥ	ø	ø
padārthaḥ	3-2. *padārthaḥ	3. *padārthaḥ	2. padārthaḥ
anusamdhīḥ	5. *anusamdhīḥ	4. *anusamdhīprabandhaḥ	3. anusamdhīḥ
codyaparihāraḥ	4. *codyaparihāraḥ	6. *viruddhaparihāraḥ	5. codyaparihāraḥ
ø	ø	2. *abhiprāyaḥ	4. abhiprāyaḥ
ø	ø	5. *upamā	ø

この一覧より、『釈軌論』の五相はヴァスバンドゥ独自のものではなく、む

しろ自身に遡る伝統を踏襲したものであることが判明する。したがって『釈軌論』における註釈方法の典拠として、少なくとも「摂積分」と \**Sūtrālamkāra* の二文献があったと推測される。『釈軌論』の制作に際し、ヴァスバンドゥは「摂積分」に範を得たと思われるが、それ以上に重要な典拠として、\**Sūtrālamkāra* の存在があったことは、『釈軌論』最後部における直接的な引用から明らかである。

なお、『釈軌論』の中で「摂積分」が明示的に言及されることはない。さらに五相各相の定義内容を比較してみると、ヴァスバンドゥは「摂積分」における定義を踏襲しつつも、かなり大幅に書き換え、よりわかりやすく整理している。各相の具体的な比較は、別稿を期して論ずる。

## 付論 『釈軌論』と「摂積分」における語義解釈法の共通性

### 『釈軌論』の提唱する語義解釈法

これまでに確認してきたように、『釈軌論』と「摂積分」は註釈方法に関して全体の骨格を共有する。一方で各相の個別的な定義内容は異なっている。ヴァスバンドゥが「摂積分」を踏襲して『釈軌論』を著述したのは明らかであるが、その際に五相の定義内容に大きく手を加え、改良を施した。そうした中で唯一、「摂積分」における方法をそのまま踏襲した箇所があり、それが同義異語 (paryāya)、定義 (lakṣaṇa)、語源解釈 (nirukti)、分類 (prabheda) という四つの観点に基づく語義解釈法である。『釈軌論』では第三相「語義」のもと、大きく分けて四種の語義解釈法が提示されているが、当該方法はその第四に相当する (第三章の冒頭に位置する)。『釈軌論』における当該の語義解釈法は、以下のとおりである。

[VyY] [LEE 162.4-15; D shi 83b4-7; P si 98a7-b2]

さらに、四つの行相 (\*ākāra) によって、「語義」は理解されるべきである。〔すなわち、〕

(1) 同義異語 (\*paryāya) によって、(2) 定義 (\*lakṣaṇa) によって、(3) 語源

解釈 (\*nirukti) によって、(4) 分類 (\*prabheda) によって、である。

そのうち、(1) 同義異語とは、別名のことである。(2) 定義とは、ある対象物にその名 (\*nāman) が存在する〔その対象〕のことである。(3) 語源解釈とは、〔当該の〕名詞の由来を説明することである。(4) 分類とは、有色 (\*rūpin)・無色 (\*arūpin)、有見 (\*sanidarśana)・無見 (\*anidarśana) などの種類 (\*prakāra) を分類することによって言及されるべきものである。

そのようであれば、あらゆる行相を伴った語義が完全に説明されることになり、無碍解 (\*pratisamvid) の因も形成されているのである。

当該の方法は、ある経句を註釈するに際し、当該語句の同義異語・その定義・語源解釈・下位分類を示すことで、容易に理解させるためのものである。註釈文献の中では、実際には、この四点が必ず並べて列挙されるわけではなく、ある経句については一つが単独で用いられ、ある経句については幾つかが併用して用いられている。

続いてヴァスバンドウは、「同義異語」「定義」「語源解釈」「分類」を個別に解説する。

### 「同義異語」

[VyY] [LEE 162.16-23; D shi 83b7-84a2; P si 98b2-4]

所化の違いに基づいて、或る場合には、或る〔語義〕が解説されるべきである。世尊によっても、或る〔経片〕には、同義異語だけが解説されている。例えば、『縁起経』では、

〔先に説いた〕あれこれに対する、如実には知らないこと、無見、無現観、暗黒、癡、無明、闇、以上が「無明」<sup>(8)</sup>と呼ばれる。

と説かれている如くである。

### 「定義」

[VyY] [LEE 162.24-163.4; D shi 84a2-3; P si 98b4-6]

或る〔経片〕には、定義だけが〔解説されている〕。例えば、その同じ  
〔『縁起経』〕では、

「識を縁として名色が〔生ずる〕」という中で、「名」とは何か。無色  
なる四つの蘊である。〔すなわち〕受蘊乃至識蘊である。「色」とは何  
か。およそ何であれ色であるもの、そのすべては、四大種と四大種所  
造である。<sup>(9)</sup>

と説かれている如くである。

### 「語源解釈」

[VyY] [LEE 163.5-8; D shi 84a3-4; P si 98b6-7]

或る〔経片〕には、語源解釈だけが〔解説されている〕。例えば、〔所食  
〔経〕〕(\**Khādaniya*) では、

「傷めつけられる」, 「傷めつけられる」というわけで、色取蘊と呼ば  
れる。<sup>(10)</sup>

と説かれている如くである。

### 「分類」

[VyY] [LEE 163.9-16; D shi 84a4-5; P si 98b7-8]

或る〔経片〕には、分類だけが〔解説されている〕。例えば、

「無明を縁として諸行が〔生ずる〕」という中で、「諸行」とは何か。  
諸行は三つある。身行と語行と意行とである。「諸行を縁として識が  
〔生ずる〕」という中で、「識」とは何か。六識身である。<sup>(11)</sup>

と説かれている如くである。

「語義」(padārtha) を解説し終えた。

以上の議論において解釈例として引用される経句のうち、実に三例が『縁起  
経』からの引用であるように、当該の語義解釈法は『縁起経』と親和性が高い。  
当該經典の「註釈」(vyākhyā) にして、『釈軌論』, 『成業論』に続くヴァスバ

ンドウの作品である『縁起経釈』(Pratītyasamutpādayākyā)などはほとんどこの語義解釈法に基づく註釈であるし、あるいは他の唯識系論書においても多用<sup>(12)</sup>されているため、一般的な解釈法であったに違いない。なお、当該箇所では例示される用例がすべて経句に由来する点は注目に値する。つまりヴァスバンドウは、経句を解釈するための語義解釈法を、経句自体の中から導き出している。そして、複数の経句の中に法則性を見出し、その法則性に基づいて経句を解釈する方法を提案している。

### 「摂釈分」の提唱する語義解釈法

さて、当該の語義解釈法はヴァスバンドウによる創見ではなく、「摂釈分」に由来する。同文献の「語義」解説箇所には次のように記されている。

[VyS] [D hi 55a4-5; P yi 65a6-7]

そ〔の「義」〕のうち、「語義」も四つの行相によって説明されるべきである。〔すなわち、〕

(1) 名詞の同義異語の説明と、(2) 定義を本質とする〔語義〕に基づく〔経の〕骨格の説明と、(3) 語源解釈の説明と、(4) 種類を分類することによって、〔説明されるべき〕である。

「摂釈分」が提唱するこの語義解釈法は、『釈軌論』のそれと逐語的に一致する。したがって語義解釈の手法という点でも、ヴァスバンドウは「摂釈分」に範を得ていたと言える。

### 注

- (1) 『釈軌論』中には mdo sde'i dgos pa、あるいは mdo sde rnam kyī bsdu pa'i don といった表現が確認されるため、当該箇所における mdo sde'i は「目的」のみならず、五相すべてに係るものとみなす。
- (2) OBERMILLER [1931: 71, n.677] が指摘するように、『釈軌論』総括偈第 1 偈はハリバドラ (Haribhadra) の『現観莊嚴論の光明』(Abhisamayālaṃkāralokā, AAĀ) に引用されている。したがって上に掲げた各相のサンスクリット原語は AAĀ のそれに基づく。AAĀ WOGIHARA 15.24-27; VAIDYA 277.16-19:



prajñānam sapīṇḍārthaṃ padārthaḥ sānuśāṃdhikāḥ /

sacodyaparihāraś ca vācyaḥ sūtrārthavāḍibhiḥ //

iti pañcabhir ākāraiḥ sūtram vyākhyāṭavyam iti *Vyākhyāyuktāu* nirṇītam ity  
abhihitam eva prajñānam.

- (3) 本庄[1989: 39, 173]が指摘するように、総括偈第2偈はヴィーリヤシュリーダッタ (Vīryaśrīdatta) の『決定義経註』(*Arthavinīśayanibandhana*, AVN) に引用されている。AVN SAMTANI 72.4-5:

śrutvā sūtrasya mātmyam śrotur ādarakāritā /

śravaṇadgrahaṇam syād ity ādau \*\*vācyaṃ prajñānam //

(\*DE JONG [1975: 117]の訂正案に従い、SAMTANI: vācyaṃ を vācyaṃ に訂正する。  
本庄[1989: 160]も併せて参照。)

- (4) この点については HORIUCHI [2008]を参照。

なお、説法(法話)を行う比丘が、何を、いかなる順序で語るべきかについては、『釈軌論』第二章(LEE 101.26f, 李鐘徹の算出では sūtra 62, 63)と第五章(LEE 253.1f.)において引用される『広義法門経』(*Arthavistaradharmaparyāya*)に説かれている。したがって『釈軌論』第五章冒頭の記述は、当該経典に典拠を求め得るかもしれない。

- (5) 『釈軌論』に先行する『俱舍論』の段階で、3箇所ほど「摂積分」との平行箇所があると KRITZER [2005: xxxiii]により指摘されている。KRITZERの指摘する3用例は以下のとおり(なお KRITZER [2005]では「摂積分」が \**Vivaraṇasamgrahaṇī* という旧称で呼ばれているが、この旧称が誤りである点については向井[1996: 370-71]を参照。)

• AKBh PRADHAN 3.1-4 ← VyS P yi 64b6-7 (KRITZER [2005: 3-4])

• AKBh PRADHAN 80.22-23 ← VyS (Chi.), no.1579, T30, 751a24-b1 (KRITZER [2005: 94-95])

• AKBh PRADHAN 460.1-3 ← VyS P yi 64b5-65a2 (KRITZER [2005: 388-389])

- (6) 当該文献は『大乗莊嚴経論』(*Mahāyānasūtrālamkāra*)とは別の文献である。その名称から、馬鳴作『大莊嚴論経』(鳩摩羅什訳, 大正 no.201)との関連が予想される。しかし、かつて SYLVAIN LÉVI と HEINRICH LÜDERS との間で論争が繰り広げられたように、『大莊嚴論経』もまた多くの謎を孕んでいる。その論争の経過を省略して、現在の定説のみを述べれば、馬鳴作『大莊嚴論経』は、LÜDERS [1926]が取り上げた *Drṣṭāntapaṅkti* (DP), HAHN [1982]が取り上げた、チベット大蔵経テンギル(本生部)に収録される *Drṣṭāntamālyā* (DM) と同一文献であり、さらに『大莊嚴論経』の実態は、実は鳩摩羅邏多(Kumāralāta, 童受)の『喩鬘論』である、との HAHN [1982]の所見が定着している。つまり、馬鳴作『大莊嚴論経』(no.201)の中身は童受作『喩鬘論』である可能性が高く、さらに鳩摩羅什による翻訳であるかどうかさえ定かでない。当該文献が DP, DM と同一文献である以上、馬鳴作『大莊嚴論経』という作者及び著作名は誤って伝承された可能性が生ずる。そして『大莊嚴論経』(no.201)とは別の、アシュヴァゴーシャによる真の

\**Sūtrālaṃkāra* が存在した可能性が, HANISCH [2007] により報告されている。ALBRECHT HANISCH は、アーリヤシューラ (Āryaśūla) の *Jātakamālā* に対する註釈文献にして、チベット語訳でのみ現存する *Jātakamālāṭīkā* (JMT) に、gZhan la phan pa'i dbyangs (\*Parahitaḥṣa = \*A-sva-ghoṣa) という人物名ならびにその著作である *mDo sde rgyan* (= \*SūA) から、三つの頃の引用例を確認した。JMT の著者であるダルマキールティ (Dharmakīrti) は、明らかにアシュヴァゴーシャの著作としてこの \*SūA を引用している。さらに HANISCH [2007: 199] によれば、この三例とも『大莊嚴論経』, DP, DM のいずれにも同定することができないという。かかる点から HANISCH [2007] は、アシュヴァゴーシャの \*SūA という文献が存在したのではないかと推測する。

- (7) ASBh TATIA 142.11-12: **vyākhyāsaṃgrahamukhaṃ** yatra sūtrasyotpattiprayojanam padārtho 'nusandhir abhiprāyaś codyaparihāraś ca varṇyate.
- (8) PSĀVN VAIDYA 117.18-19: yad atra tatra yathābhūtasyaājñānam adarśanam anabhisamayāḥ tamasaṃmoho 'vidyāndhakāram iyam ucyate avidyā; NidSa 16.4: yatra tatrājñānam adarśanam anabhisamayasaṃmohāḥ tamasaṃmoho 'vidyānu(śayaḥ/) ayam ucyate avidyā.
- (9) PSĀVN VAIDYA 117.24-27: vijñānapratyayaṃ nāmarūpam iti nāma katamat. catvāro 'rūpiṇaḥ skandhāḥ. katame catvāraḥ. vedanāskandhaḥ saṃjñāskandhaḥ saṃskāraskandhaḥ vijñānaskandhaḥ. rūpaṃ katamat. yat kiṃcid rūpaṃ, sarvaṃ tat catvāri mahābhūtāni. catvāri ca mahābhūtāny upādāya iti.; NidSa 16.7: vijñānapratyayaṃ nāmarūpam iti nāma katarat. catvāro 'rūpiṇaḥ skandhāḥ. vedanāskandhaḥ saṃjñāskandhaḥ saṃskāraskandhaḥ vijñānaskandhaḥ. rūpaḥ katarat. yat kiṃcid rūpaṃ, sarvaṃ tat catvāri mahābhūtāni. catvāri ca mahābhūtāny upādāya itīdam ca rūpaṃ.
- (10) 当該経句は『俱舍論』「界品」にも引用されている。その出典として、本庄 [1985: 1-2] は『雜阿含經』第46經 (T2, 11b21f.), パーリ平行經として SN 22.79.5 (= SN III 85f.) を指示する。Cf. AKBh PRADHAN 9.10-12: uktaṃ bhagavatā rūpyate rūpyata iti bhikṣāvas tasmād rūpopādānaskandha ity ucyate. kena rūpyate. pāṇisparśenāpi spṛṣṭo rūpyata iti vistarāḥ.
- (11) PSĀVN VAIDYA 117.20-22: avidyāpratyaḥ saṃskara \*iti saṃskārāḥ\* katame. trayāḥ saṃskārāḥ kāyasaṃskāro vāksaṃskāro manasaṃskārā iti. saṃskārapratyayaṃ vijñānam katarat. ṣaḍ vijñānakāyaḥ. (チベット語訳に基づいて \*\* 内の梵文を還元した。) ; NidSa 16.5: avidyāpratyaḥ saṃskārā iti saṃskārāḥ katame. trayāḥ saṃskārāḥ kāyasaṃskāro vāksaṃskārāo manasaṃskārāḥ; NidSa 16.6: saṃskārapratya(yaṃ) vijñānam (iti vi)jñāna(m) katarat. ṣaḍ vijñānakāyaḥ.
- (12) 当該の語義解釈法と類似した解釈法が、『中辺分別論』第一「相品」(Lakṣaṇaparicheda) の第12偈にもみられる。śūnyatā という語を解説するにあたり、第12偈では「語源解釈」を除く三解釈に「そ〔の同義異語〕の意味」と「論証」とを加えた解釈法が提示されている。

MAVBh ad MAV I-12, NAGAO 22.17-20: evam abhūtaparikalpaṃ khyāpayitvā  
yathā śūnyatā vijñeyā tan nirdiśati.

lakṣaṇaṃ cātha paryāyas tadartho bheda eva ca /

sādhanaṃ ceti vijñeyaṃ śūnyatāyāḥ samāsataḥ //

以上のように虚妄分別を解説し終えて、次に空性がどのように理解されるべきかを説く。

要約すれば、定義、同義異語、そ〔の同義異語〕の意味、分類、論証とが、空性に関して知られるべきである。（『中辺分別論』第1章第12偈）

「相品」は「虚妄分別」（Abhūtaparikalpa）と「空性」（Śūnyatā）の二節に大別される。上記引用箇所は後者の冒頭部に位置するが、「空性」節は全11偈（kk.12-22）から成る。上に引用した第12偈は総論に、残りの第13-22偈は各論に相当する。具体的には、定義（k.13）、同義異語（k.14）、そ〔の同義異語〕の意味（k.15）、分類（k.16-20）、論証（kk.21-22）と配当されている。

## 略号と参考文献

### 一次文献

- AAĀ *Abhisamayālaṃkāṛāloka* (Haribhadra): WOGIHARA Unrai (Ed.), *Abhisamayālaṃkāṛāloka Prajñāpāramitāvyākhyā: commentary on Aṣṭasāhasrikā-Prajñāpāramitā*. Tokyo: Toyo Bunko, 1932-1935; Paraśurāma Lakshmaṇa VAIDYA (Ed.), *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā: with Haribhadra's commentary called Āloka*. Darbhanga: Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, 1960.
- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu): Pralhad PRADHAN (Ed.), *Abhidharmakośabhāṣya*. Tibetan Sanskrit Works Series vol. 8, Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1967.
- ASBh *Abhidharmasamuccayabhāṣya* (Jinaputra?): Nathmal TATIA (Ed.), *Abhidharmasamuccaya-Bhāṣyam*. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1976.
- AVN *Arthavinīṣṣayanibandhana* (Vīryaśrīdatta): Narayan Hemandas SAMTANI (Ed.), *The Arthavinīṣṣaya-Sūtra and Its Commentary (Nibandhana) : written by Bhikṣu Vīryaśrīdatta of Śrī-Nālandāvihāra*. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1971.
- MAVBh *Madhyāntavibhāgaḥbhāṣya* (Vasubandhu): NAGAO Gadjin (Ed.), *Madhyāntavibhāga-bhāṣya : a Buddhist Philosophical Treatise Edited for the First Time from a Sanskrit Manuscript*. Tokyo: Suzuki Research Foundation, 1964.
- NidSa *Nidānasamūyukta*. Chandrabhāl TRIPATHĪ (Ed.), *Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānasamūyukta*. Sankrittexte aus den Turfanfunden 8, Berlin: Akademie-Verlag, 1962.
- PSĀVN *Pratītyasamutpādaivibhāgaṅgīrdeśa*. Paraśurāma Lakshmaṇa VAIDYA (Ed.), *Mahāyānasūtrasaṃgraha*, Part 1, Darbhanga: Mithila Institute of Post-

- Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, 1961, pp. 117-118.
- VyS \**Vyākhyāsaṃgrahāṇī* : D no. 4042; P no. 5543.
- VyY *Vyākhyāyukti* (Vausbandhu): LEE Jong Choel (Ed.), *The Tibetan Text of the Vyākhyāyukti of Vasubandhu, critically edited from the Cone, Derge, Narthang and Peking editions*. Bibliotheca Indologica et Buddhologica 8, Tokyo: Sankibo Press, 2001; D no. 4061; P no. 5562.
- VyYT *Vyākhyāyuktiṭīkā* (Guṇamati): D no.4069; P no.5570.

## 二次文献

本庄良文

- 1985「阿含と俱舍論—界品(2)—」『南都仏教』第54号, 1985, pp. 1-17.
- 1989『決定義經・註: 梵文和譯』京都: 私家版, 1989.
- 2001「『釈軌論』第一章(上) 世親の經典解釈法」『香川孝雄博士古稀記念論集: 仏教学浄土学研究』京都: 永田文昌堂, 2001, pp. 107-120.

向井亮

- 1996「『瑜伽師地論』「撰積分」「撰異門分」の結構—uddāna 頌による科判—」『今西順吉教授還暦記念論集: インド思想と仏教文化』東京: 春秋社, 1996, pp. 369-380.

山口益

- 1959「世親の釈軌論について」『日本仏教学会年報』第25号, 1960. (山口[1973: 153-188]に再録。本稿で山口[1959]を指示する際は、頁数のみ山口[1973]の頁数を用いる)

- 1973『山口益仏教学文集』下, 東京: 春秋社, 1973.

HAHN, Michael

- 1982 “Kumāralātas *Kalpanāmaṇḍitikā* *Drṣṭāntapañkti*. Nr. 1 Die Vorzüglichkeit des Buddha,” *Zentralasiatische Studien* 16, 1982, S. 309-336.

HANISCH, Albrecht

- 2007 “New Evidence of Aśvaghōṣa’s *Sūtrālaṃkāra*: Quotation from the *mDo sde rgyan* of gZan la phan pa’i dbyaṅs in the Tibetan Version of Dharmakīrti’s *Jātakamālāṭīkā*,” *Indica et Tibetica. Festschrift für Michael Hahn*, Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, 2007, pp. 193-205.

HORIUCHI Toshio

- 2008 “How to Interpret and Preach the Buddha’s Teaching: The Discussion in Chapter 5 of the *Vyākhyāyukti*,” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 56-3, 2008, pp. 1126-1130.

DE JONG, Jan Willem

- 1975 “Review: N. H. Samtani(Ed.), *The Arthaviniścaya-sūtra & its Commentary (Nibandhana)*,” *Indo-Iranian Journal* XVII Nos. 1/2, 1975, pp. 115-118. (Reprint: *Buddhist Studies*, Berkeley: Asian Humanities Press, 1979, pp. 509-512.)

KRITZER, Robert

2005 *Vasubandhu and the Yogācārabhūmi: Yogācāra Elements in the Abhidharmakośa-bhāṣya*. Studia Philologica Buddhica Monograph Series XVIII. Tokyo: International Institute for Buddhist Studies, 2005.

LEE, Jong Choel

2001 *The Tibetan Text of the Vyākhyāyukti of Vasubandhu, critically edited from the Cone, Derge, Narthang and Peking editions*. Bibliotheca Indologica et Buddhologica 8, Tokyo: Sankibo Press, 2001.

LÜDERS, Heinrich

1926 *Bruchstücke der Kalpanāmaṇḍitikā des Kumāralāta*. Kleinere Sanskrit-Texte Heft 2, Leipzig: Deutsche Morgenländische Gesellschaft in Kommission bei F. A. Brockhaus, 1926. (Reprint: Monographien zur Indischen Archäologie, Kunst und Philologie Bd 1, Wiesbaden: Franz Steiner, 1979.)

OBERMILLER, Eugène

1931 *History of Buddhism (Chos-ḥbyung) by Bu-ston*. Part 1, Heidelberg: Institut für Buddhismus-Kunde, 1931.

SKILLING, Peter

2000 "Vasubandhu and the Vyākhyāyukti Literature," *Journal of International Association of Buddhist Studies* 23-2, 2000, pp. 297-350.